

青森県内主要都市の中心商店街の形成と特質

横 山 弘

(序)

都市の中心商店街はその都市を代表するもので、その都市の顔であると云われる。したがって、その都市の成立や性格によって中心商店街の様相を異にする。県内主要都市3市の中心商店街の形成されるにいたった過程とその特質についてのべる。

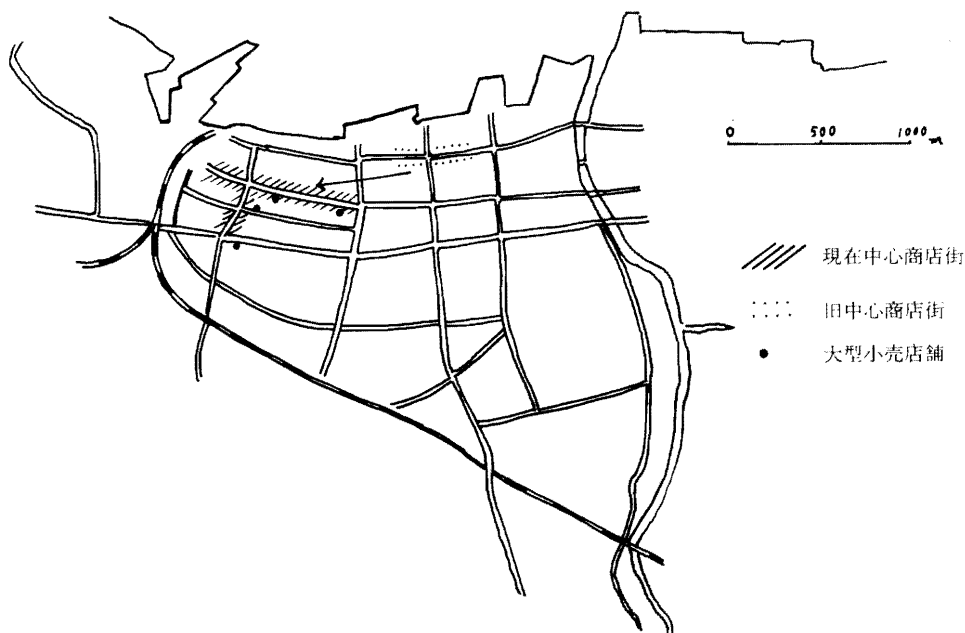
(中心商店街の形成過程)

青森市の場合：青森は1624年(寛永元)津軽藩の外港として開かれ、港町として発展してきた。港町時代には中心部は港湾臨接地区にあり、現在の本町付近であった。港町形成時代には他国から商人を募集し、種々の恩恵を与えたので、日本海に面した北陸方面から多くの商人が移住した。業種は海産物問屋をはじめ、酒屋、呉服屋、米屋など数種に限られていた。明治になって海上交通も帆船時代から蒸気船の時代にかわり、船舶も大型化し、また1891年(明治24)東北本線の開通によって北海道渡航者および貨物輸送が増加した。したがって、中心部の立地条件がかわり、駅を中心とした交通機能が活発となり、従来の港湾地区から駅前通りに商店の移動が行われるようになった。それと共に本町にあった金融機関も駅前通りに支店を開くようになった。中心部の移動をおこしたもう一つの要因は青森市の長島地区に県庁が置かれ、それを核として県会議事堂、警察本部、地方裁判所、東奥日報等が集積したため、中心部が西方に移動したと思われる。1921年(大正10)新町通りに地元の呉服店が最初のデパート松木屋を開店し、中心商店街として性格をつよめた。その後、第2次大戦中戦災にあい都心部が完全に焼失したが、その後の復興は駅前通りを中心に進められた。戦後の商業活動は駅前の闇市場、露店商の開設から始まり、それが商店街として復興するようになった。商人も顧客も鉄道を利用して、下北、上北、秋田方面から集まり駅前が大いに賑わった。その中から駅前、古川の鮮魚市場ができ、露天商を吸収して徐々に街路を整備して商店街となったのである。

新町は戦後とくに中心商店街に整備され、柳町との角には松木屋デパートが1951年(昭和26)に鉄筋コンクリート3階建てで営業を開始し、さらに「かね長」デパートが進出するなどして整備された。その後、経済高度成長時代を迎えて、中心商店街も専門店化、大型化が進められ、1973年(昭和48)には古川地区に「みなみ」デパートが開店し、翌年「中三」デパートが進出するなど大型小売店の出現が著しくなった。1977年(昭和52)には市街地内の交通混雑をさけて、南の郊外にサンロード青森としてジャスコ青森店

を核とする大型店が建設された。このように青森市の中心商店街の形成過程を見ると、港町時代には港湾隣接地区に中心商店街があり、その後鉄道の開通と青函連絡船の発着所が結合され、駅が交通の中心になると駅前通りの新町に中心商店街が移動し、かつての港湾隣接地区は衰退してしまった。この移動の要因は青森市の交通機能の変化であると云える。

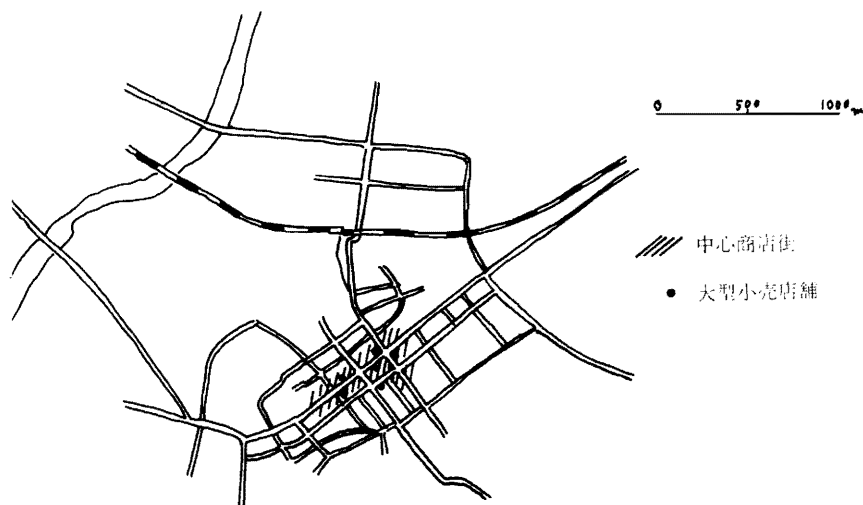
第1図 青森市の中心商店街



八戸市の場合：八戸は1629年（寛永6）南部氏の城下町として町割りがなされ、城の周囲には土族屋敷を配置し、商人町は追手門通りと直交してつくられた。商店街は市日にちなんで三日町、十三日町、二十三日町、八日町、十八日町、二十八日町などと名づけられた。禄高2万石の八戸は商人の数も少なく、木綿の古手商人が数軒にすぎなかった。その後五戸、三戸、盛岡および関東方面からも商人が入り、次第に商店街が形成された。明治になると、1879年（明治12）に最初の銀行として国立百五十銀行、1882年（明治15）には商人資本による階上銀行などが創立され、これらの金融機関の形成と共に八戸の商業も資本主義経済に突入していった。1891年（明治24）東北本線が開通したが、地元住民は鉄道を忌避したため市街地は鉄道から離れ、一時経済活動も停滞した。1894年（明治27）八戸線の開通によって経済的発展の軌道にのることができた。しかし、駅は段丘下の沖積地にあり、段丘上の市街地とは坂道で連絡されるため、青森のような駅前商店街を形成するだけの影響力はなかった。大正末期から昭和初期にかけて漁船の動力化、大型化が進み漁業が

急進展し、それによって漁港としての地位が高まった。その結果、来港する船員を対象として飲食店が繁昌し、商店街も活気を呈した。1926年（大正15）磐城セメント八戸工場が立地し、さらに1937年（昭和12）日東化学八戸工場が立地して工業都市の基盤がつくられた。戦後になって1951年（昭和26）十三日町に地元の漁業関係者が中心となり、地元新聞社長らも出資して丸美屋デパートが開店した。普通、最初のデパートは地元呉服店などの資本によって開店される例が多いが、八戸の例は地元民の百貨店がほしいという要望が結集して出来たものである。1964年（昭和39）新産都市に指定されて、臨海地域の工業誘致が活発化した。それによって人口も増加し、商店街も次第に充実されていった。昭和40年代になると、漁港の水揚げの好況などから消費市場としての将来性が買われ、1968年（昭和43）丸光デパート、緑屋の大型店が開店した。さらに1970年（昭和45）長崎屋が三日町に開店し、交叉点をはさんで丸光、緑屋と三つ巴の競争が始まった。その翌年にはニチイスーパー店が六日町に開店し、1980年（昭和55）には十三日町にイトーヨーカ堂が開店し、大型店間の競争もいよいよ激しさをまてきた。以上のように八戸市の中心商店街は城下町時代の市場に起源をもつものの上に集積して形成され、鉄道などの影響をあまりうけず、最初の位置を踏襲しているところに特色がある。

第2図 八戸市の中心商店街

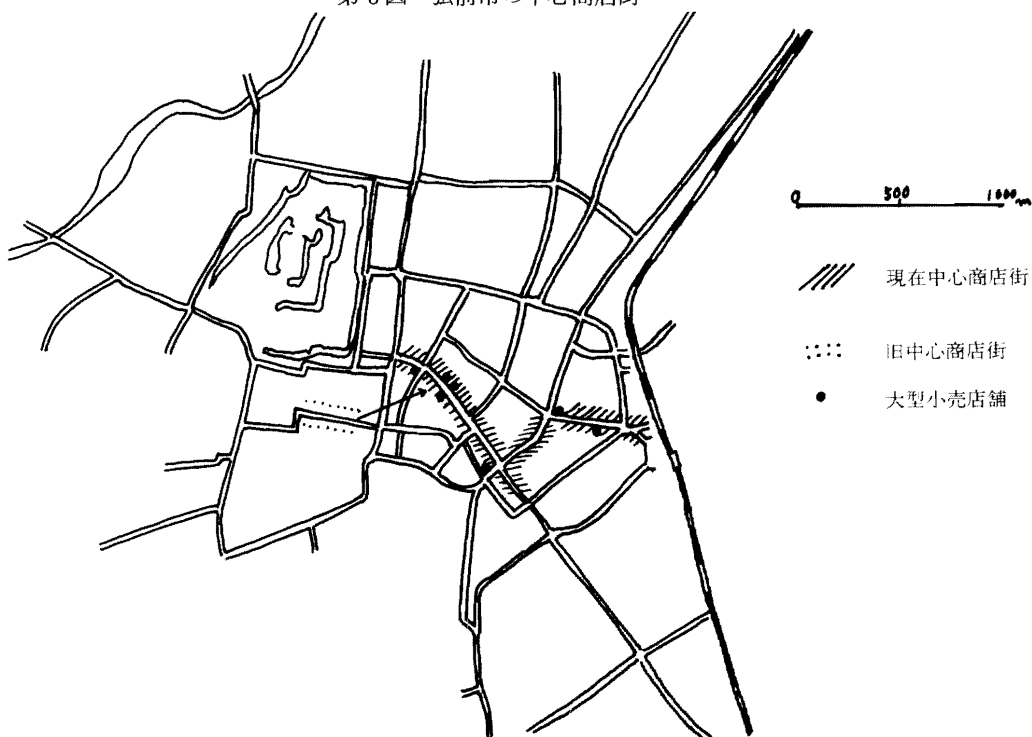


弘前市の場合：弘前は都市の成立が青森より早く、1611年（慶長16）津軽藩の城下町として開かれ、城を中心として市街地が形成された。追手前にある本町は藩御用商人の豪商が集中し、中心商店街を形成していた。本町の商人は木綿商、組物商、紙商、切細工商、

酒屋などから構成されていた。明治になって1887年（明治20）頃までは商業の中心が本町であり、弘前第一の豪商金木屋が店を構え、第59銀行本店や進新銀行本店、三井銀行出張店などもここに店を構えていた。しかし、1894年（明治27）弘前・青森間の鉄道開通によって市内の交通事情が変化し、また1897年（明治30）第8師団が市街地南部に設置されるなどして、商業の中心が次第に南東に移動して下土手町に移った。商店の移動とともに金融業も移転し、大正時代に入ると本町は全く衰微してしまった。それにかわって土手町が商店街として盛んになった。1923年（大正12）には土手町に本市で最初のデパートが地元呉服店によって「かくは」デパートとして開店された。

戦後、昭和30年代後半に大型小売店が進出し始め、1962年（昭和37）に丸三ビル、翌年ヤマダイビルが土手町に開店した。1968年（昭和43）には「中三」デパートが土手町に、さらに1971（昭和46）には「かね長」デパートが隣接して開店した。地元資本以外の大型小売店が進出してきたのはこの頃からである。さらに同年紅屋商事（スーパー）丸幸あかいし（衣料専門）が土手町に開店した。また駅前通りにも1969年（昭和44）に丸三ショッピングセンターが開店し、駅前商店街の核となった。1976年（昭和51）には超大型小売店のイトーヨーカ堂が弘南バスのターミナルと結合して開店したので、郊外からの客を大量に吸収するようになった。さらに土手町にも、「かくは」デパートの跡地に

第3図 弘前市の中心商店街



ハイローザの店舗が新築され、大型小売店の稠密化を増している。以上のように弘前市の中心商店街は、城下町時代には城の近くに立地していたが、その後の駅の開設や師団の設置によって市街地の拡大が行われたのに対して、それに追従するように東南方向に移動し、土手町商店街が形成され、さらに駅前地区にもイトーヨーカ堂を核として商店街が形成され、現在進行中の駅ビルとも合わせて2つの商店街が分化しようとしている。（第3図）

（中心商店街の業種構成）

青森、八戸、弘前3市の中心商店街の業種構成を見ると、青森市の場合は駅前からのびる新町通りとそれに直交する古川通りが中心商店街であり、百貨店は新町通りに3店、古川通りに1店立地して、文字通り商業機能の中枢が集中している。織物、衣服、身回品店は新町通りに18.8%、古川通りに16.5%の構成率を示しているが、この業種は中心商店街の構成に主要な部分をなすもので、この中で婦人子供服店が高い比率を示している。飲食料品店は新町通り39.1%、古川通り46.6%と高い構成率であるが、この2つの商店街は駅に近く、駅寄りの場所に魚菜市場があるため、とくに鮮魚店と野菜果実店が大きなウエイトを占めている。飲食料品店の中で各種食料品店や食肉店が少ないのは、百貨店やスーパーマーケットでも扱っており、専門店として独立しているものが少ないためである。飲食店は新町通りが23.5%、古川通りが19.9%で構成率は飲食料品店に次いで多い。

自動車小売販売店は新町通りに2店あるが、これは中心商店街に適応する業種ではないが、駅前に近いという特殊性から来ているものである。自転車小売販売店は古川通りに5店ある。家具・建具・什器店は新町通りに4.8%、古川通りに4.5%で、その中では家庭用機器店、金物荒物店が比較的高い比率を示している。その他の小売業では、医薬品化粧品店が新町通りに1.8%、古川通りに2.3%の構成率となっている。それに次いで書籍文房具店が1.0%、1.4%の構成率となっている。青森市の中心商店街における業種構成の特徴は飲食料品店の比率が高いことである。これは駅に近いことと、戦後の復興が駅前のヤミ市から始まり、それが商店街に発展してきたことなどが理由としてあげられる。

八戸市の場合を見ると、中心商店街は三日町、十三日町とそれに平行して走る六日町の2つであるが、最近はいとーヨーカ堂などの大型店進出によって、連続した回遊型の商店街になりつつある。昭和54年の統計では百貨店数が三日町・十三日町に2店、六日町に1店立地している。織物・衣服・身回品店は三日町・十三日町に18.3%、六日町に21.7%の構成率を示している。これは青森市の中心商店街にほぼ似た構成率である。次に飲食料品店は三日町・十三日町に12.2%、六日町に13.9%の構成率を示し、青森市と比べて低い。八戸市の場合には魚菜市場が白銀地区にあり、中心商店街では百貨店やスーパーで扱っており、

第1表 中心商店街の業種構成（昭和54年）

	青 森 市		八 戸 市		弘 前 市	
	新 町 通 り	古 川 通 り	三日町・ 十三日町	六 日 町	土 手 町	駅 前 通
小 売 業 計	668(100.0%)	642(100.0%)	131(100.0%)	115(100.0%)	394(100.0%)	354(100.0%)
百 貨 店	3(0.4)	1(0.2)	2(1.5)	1(0.9)	3(0.8)	2(0.6)
その他各種商品	—	—	—	—	1(0.3)	—
呉服・服地・寝具	26(3.9)	35(5.5)	6(4.6)	4(3.5)	18(4.6)	7(2.0)
男 子 洋 服	20(3.0)	11(1.7)	3(2.3)	5(4.3)	12(3.0)	8(2.3)
婦 人 子 供 服	31(4.6)	31(4.8)	6(4.6)	6(5.2)	26(6.6)	13(3.7)
靴 ・ 履 物	23(3.4)	13(2.0)	7(5.3)	3(2.6)	14(3.6)	8(2.3)
その他身回品	26(3.9)	16(2.5)	2(1.5)	7(6.1)	18(4.6)	9(2.5)
各 種 食 料 品	2(0.3)	3(0.5)	—	1(0.9)	—	3(0.8)
酒 ・ 調 味 料	3(0.4)	12(1.9)	1(0.8)	—	3(0.8)	11(3.1)
食 肉	6(0.9)	12(1.9)	1(0.8)	1(0.9)	10(2.5)	6(1.7)
鮮 魚	87(13.0)	131(20.4)	—	3(2.6)	21(5.3)	12(3.4)
乾 物	33(4.9)	32(4.9)	—	1(0.9)	6(1.5)	11(3.1)
野 菜 ・ 果 実	51(7.6)	44(6.9)	—	3(2.6)	21(5.3)	28(7.9)
菓 子 パ ン	39(5.8)	15(2.3)	7(5.3)	5(4.3)	27(6.8)	21(5.9)
米 穀 類	1(0.1)	6(0.9)	—	—	1(0.3)	4(1.1)
その他食料品	41(6.1)	44(6.9)	7(5.3)	2(1.7)	26(6.6)	23(6.5)
飲 食 店	157(23.5)	128(19.9)	56(42.7)	49(42.6)	74(18.8)	100(30.8)
自 動 車	2(0.3)	—	—	—	—	—
自 転 車	—	5(0.8)	—	1(0.9)	2(0.5)	3(0.8)
家具建具畳	5(0.7)	7(1.1)	2(1.5)	—	8(2.0)	4(1.1)
金 物 荒 物	11(1.6)	9(1.4)	3(2.3)	1(0.9)	4(1.0)	2(0.6)
陶磁器 ガラス	2(0.3)	4(0.6)	1(0.8)	2(1.7)	4(1.0)	1(0.3)
家庭用機器	10(1.5)	8(1.2)	3(2.3)	2(1.7)	16(4.1)	12(3.4)
その他什器	5(0.7)	1(0.2)	—	—	—	—
医薬品化粧品	12(1.8)	15(2.3)	3(2.3)	1(0.9)	9(2.3)	5(1.4)
農 耕 用 品	—	3(0.5)	—	1(0.9)	2(0.5)	1(0.3)
燃 料	1(0.1)	4(0.6)	—	—	2(0.5)	2(0.6)
書籍文房具	7(1.0)	9(1.4)	14(10.7)	1(0.9)	7(1.8)	8(2.3)
中 古 品	1(0.1)	1(0.2)	—	—	1(0.3)	2(0.6)
そ の 他	63(9.4)	42(6.5)	7(5.3)	16(13.9)	58(14.7)	39(11.0)

鮮魚店や野菜果実店、乾物店などが少ないのである。それに対して飲食店は2つの商店街とも42%をこえており、3市の中では最も高い集積率を示している。家具、建具、什器店は三日町、十三日町が6.9%、六日町4.3%で、青森市とやや似た構成率を示している。その他小売業では書籍文房具店が三日町・十三日町で10.7%と3市の中では最も高い。八戸市の中心商店街における業種構成の特徴は飲食料品の構成率が低いことと、飲食店の比率が高いことである。

弘前市の場合は中心商店街が土手町と駅前通りの2つに分かれており、土手町には百貨店が3店、駅前通りに2店立地している。織物・衣服・身回品店は土手町が最も高く22.4%の構成率で、中心商店街の風格を示している。それに対して駅前通りはやや低く12.8%の構成率となっている。飲食料品店は土手町が29.1%、駅前通りが33.5%の構成率を示し駅前通りに飲食料品店の集中が見られるのは青森市の場合と類似している。この業種の中で土手町は菓子パン店が多いのに対して、駅前通りは野菜果実店が多い。飲食店は土手町が、18.8%に対して、駅前通りが30.8%と高い。家具・建具・什器店は土手町が8.1%で、3市の中で最も高く、とくに家庭用機器店が多いのが特色である。その他の小売店では土手町が20.1%で最も高く、駅前通りは16.2%でやや低率となっている。弘前市の中心商店街の特色は土手町が織物・衣服・身回品店の構成率が高いことと、家具・建具・什器店。その他小売店の構成率が高いことである。（第1表）

（結 語）

青森・八戸・弘前3市の中心商店街の成立を見ると、藩政時代には港町、城下町の都市構造の中で、それぞれの都市機能に応じた配置がなされた。しかし、明治以降の社会経済の変化とともに中心商店街も移動をおこし、青森、弘前は駅前の方向に移動した。しかし、八戸は駅前の立地条件が中心商店街を移動させる力となり得なかったため、旧来の配置を継承している。その店舗構成は中心商店街の位置によって影響を受け、駅前に近い商店街は中心部の商店街と比較して、飲食料品店や飲食店の比率が高く、衣服・身回品店の比率が低い傾向が見られる。

（参考文献）

- 1) 横 山 弘 (1977) : 交通体系の変化とその影響（青森市の場合）
弘前大学教育学部紀要第37号
- 2) 横 山 弘 (1981) : 青森県における都市の成立と発展過程
弘前大学教育学部紀要第45号